

稲田清一先生のご退職によせて

歴史文化学科教授 中 町 信 孝

稲田清一先生は、2022年3月末をもって甲南大学文学部教授の職を退かれます。定年より3年早いご勇退となります。先生は1979年3月に名古屋大学文学部を卒業され、同大学院修士課程に進学されました。その後1982年9月より2年間にわたる中国の南京大学へのご留学をはさみ、1987年3月に名古屋大学文学研究科の博士課程に単位取得の上退学されました。甲南大学には1992年4月に専任講師としてご着任になり、1994年4月に助教授、2001年4月に教授に昇任されました。着任当初は文学部社会学科の史学地理学研究室の配属でしたが、2001年の歴史文化学科設立とともに同学科に移動され、以後、教育や校務に多大な貢献をされてきました。

稲田先生は中国史がご専門です。研究の道に入られた当初は太平天国の乱に関心を持たれ、その時期の少数民族チワン族の動向や地域エリートの社会観についての論文を発表されました。そこから江南デルタ市鎮社会の構造的変動へと関心を広げられ、「鎮居地主」というキーワードでその地の地域リーダーの動向を分析する諸論考を発表されました。中国地域社会への関心は市鎮社会に留まらず、太湖流域の農村社会の分析にも手を広げられます。ここでは中華民国期に作成された地籍図を利用するとともに、現地住民への聞き取り調査も行われました。2010年頃からは、再び民衆反乱史、あるいは少数民族の動向（この場合は客家）への関心から、清代の黃通の乱の研究に取り組み、福建省での史料調査をもとに諸論考を発表されました。最近では日本軍占領以前の南京における土地整理事業を分析するため、南京および台北での史料調査を精力的に行われています。

こうした先生の研究活動を眺めると、その時々状況に応じてトピックを変えながらも、地域においては江南地方から広西、福建にいたる、中国南半の広い範囲をカバーし、時代についても明末から清代を経て民国期にいたる幅広いタイムスパンを扱われていることがうかがえます。そしてさまざまな対象を扱いつつその根底には常に、市鎮や農村に暮らす市井の人びとの

生活への理解、および中国社会のマイノリティーへの関心が貫いています。

また、先生のご研究は、一次史料に基づく徹底した実証を旨とされ、そのようなスタンスからこれまでさまざまな史料を見いだされては日本の学界に紹介されてきました。それは明末清初に作成された都図表に始まり、民国期における地籍公布図や、地方刊行の新聞である嚮報、檔案史料などに及びます。こうした史料の探索は、先生がご留学以降、ほぼ毎年欠かさず中国、あるいは台湾に渡航され、新出史料の閲覧・蒐集を継続された賜物と言えるでしょう。

教育活動について言えば、先生のゼミにはいつも多くの個性的な学生が先生をしたって集まっていたが、それには先生の特徴ある教育方針が影響していました。先生は授業において、映画や小説などの文化コンテンツを紹介し、学生たちの知的関心を常に刺激してこられました。また、時に悩みを抱える学生に対してはこまめに電話連絡をとられ、ようやく登校した学生に対して親身に相談に乗られることもありました。そんな先生のゼミからは、研究職を含め、さまざまな職種に就職する卒業生が輩出しています。また、歴史文化学科の自主ゼミ活動「歴らぼ」で「並河調査班」を創設し、本学図書館に所蔵されている写真家並河萬里の展覧会ポスターなどの貴重資料を整理する作業も取り仕切られました。その成果は現在、図書館においてデータベースとして保存されています。

校務においては、歴史文化学科の学科主任および大学院の応用社会学専攻主任を数次にわたり務められました。とりわけ歴史文化学科創設の構想と実務を牽引され、本学科の創設時からのスタッフとして一貫して学科・学部の校務にあたってこられたことこそ、何よりも大きな貢献でした。また、全学的には2014年4月から図書館長を3年間、2019年4月から学生部長を1年間務められました。図書館長を務められている間には、ライブラリ・サーティフィケート制度の設立に尽力されました。

このたび稲田先生のご退職にあたり、先生がこれま

でいかにどっしりと我々を支えてくださってきたかを
改めて思い、感謝せずにはられません。今後、先生

のご研究のますますのご発展を祈り、ご健康を願いつ
つ、紹介文の筆を置きたいと思います。